

座長のことば

耳鼻咽喉科領域の内視鏡医療の発展：耳科手術と副鼻腔手術

枝松 秀雄

東邦大学医学部耳鼻咽喉科学講座 (大森) 教授

1) 耳鼻咽喉科領域の代表的な手術部門である耳科学と鼻科学における内視鏡医療の最近の進歩は目覚ましいものがある。今回は大森病院の和田弘太准教授に鼻科手術を、水上 (安田) 真美子医局長に耳科手術における内視鏡医療の実践と今後期待される進歩について講演していただいた。

どちらの領域も、内視鏡を使用し明るい視野を確保することで複雑な手術解剖の理解が極めて良好となる。また腹腔や胸腔など他臓器の内視鏡手術と比べて、副鼻腔や中耳は術野のスペースは格段に狭いため内視鏡操作には特殊な教育と修練が必要となる。今回の二人の講演者は本邦における第一線の内視鏡医療技術者であり、大橋病院や佐倉病院から参加した若い医師にとっても充実した教育的プログラムとなった。

2) 鼻科手術における内視鏡の導入は以前より盛んに行われてきているが、副鼻腔手術の中でも頭蓋底や眼球に近い蝶形骨洞とその周囲の解剖は多様性があり、安全な手術アプローチには十分な手術経験と詳細な解剖の検討が必要である。耳鼻科領域で最も手術時の問題や合併症などが多いのも、副鼻腔内視鏡手術である。今回の和田医師の講演では、難治手術例に対する内視鏡手術の動画と手術前の computed tomography (CT) の読影について明快な解説がなされ、Haller cell の分類を分かりやすく紹介された。今後の副鼻腔手術での合併症の防止に対する教育講演となった。

3) 耳科手術への内視鏡の導入は副鼻腔手術とは異なり、いまだ一般的ではない。しかし大森病院では10年前から積極的に行われてきて、日本における耳科内視鏡手術のパイオニアとして国内外での評価は高い。今回は内視鏡による明るく死角のない広角な術野の確保と、侵襲の少ない minimally invasive surgery として有効性が、慢性中耳炎、中耳奇形、先天性真珠腫、耳硬化症など多くの耳科疾患で実

践可能であることが紹介された。また他施設ではいまだ行われていない小児への内視鏡手術の導入の可能性も明確に示された。

4) 内視鏡医療は、全身のほぼ全ての領域の手術に積極的に導入されてきた。内視鏡による明るく鮮明な視野は、手術手技を学ぶ若い医師にとって解剖を理解するにも病変を観察するにも魅力的であり、多くの手術指導施設が生まれ、手術手技講習会への参加者も年々増加している。一方、内視鏡手術はカメラを左手に持ち右手で手術操作をするため、専用の手術機器や手術支援機器の開発がなされてきているが、熟練した手術手技の演習と体得が必須である。このため、教育機関としての大学病院での研修は重要である。これを怠ると重大な医療事故を引き起こす危険性が高いことを、指導を受ける研修医も指導する上級医師も十分に念頭に置かなければならない。

各種メディアによる医療情報の普及の結果として、患者も内視鏡による皮膚切開の小さな、手術後の回復が早い、低侵襲手術を強く希望するようになった。この期待に応えるためにも、手術医師は内視鏡手術の長所と問題点を意識しながら、内視鏡の適応が良い手術は何かを考え、無理な拡大応用を避けることが大切である。

将来の内視鏡医療の展望として、内視鏡の手術時の有用性と患者への負担の少ない医療の可能性は広く期待されるものである。一方、経験の少ない術者が内視鏡を拡大使用して起こる医療事故の報告も少なくない。これらを解決するためには、navigation system の併用や laser surgery の導入、さらに3次元画像による解剖の理解など期待できることは多い。東邦大学大森病院の耳鼻咽喉科は副鼻腔手術でも耳科手術でも、これらの先進技術の積極的導入を行い、今後一層安全な手術の普及のための啓蒙活動に努めるべきであることが再認識された有用な2つの臨床講演であった。